

あけのほし 2012年9月3日

「神の子ども」

菊田行佳

唯一の神以外にいかなる神もないことを、わたしたちは知っています。現に多くの神々、多くの主がいると思われているように、たとえ天や地に神々と呼ばれるものもいても、わたしたちにとっては、唯一の神、父である神がおられ、万物はこの神から出、わたしたちはこの神へ帰って行くのです。また、唯一の主、イエス・キリストがおられ、万物はこの主によって存在し、わたしたちもこの主によって存在しているのです。

(I コリントの信徒への手紙 8章4-6節)

私がキリスト教教会の牧師になりたいと考えるようになったきっかけとして、キリスト教がどうしても私たちの社会には必要だと実感したということがあります。それは、今回の聖書箇所で言われているような、世界には唯一の神がいて、皆、誰もがそこから出ていて、そしてその神の元にいずれ帰って行くということが、結局のところ、私たちにとって必要となってくるのだと考えたからです。

私たち人間は、神ただ一人によって造られ、この世界に出現し、その神によって存在させられているということが、ここで言われていることです(人間以外の万物も言われていますが、今回は人間にしばらくしたいと思います)。このことが、私はどの人間にとっても、良い知らせ(福音)だと考えていますが、それには、私が経験したことが反映されています。

私は以前、横浜で児童養護施設という子どもの施設に勤めていました。そこにやってくる子どもたちは、親はいるのですが、皆、何らかの事情を抱えて、子どもの養育を出来ない状況にありました。そのような事情を抱える親に代わって、子どもの養育をするのが私たち職員の役目です。施設での職務として何が大変かといえば、入所してくる子どもたちを自立させて行くということでした。法律によって、18歳までが養育の期間なのですが、それまでに精神的にも経済的にも自立して生きて行けるように子どもたちを育てることが、職員の最終的な目標です。しかし、そのことが、本当に難しいことでした。ただでさえ、18歳、つまり高校卒業と共に、社会で一人でやって行くということはとても大変なことですが、それにもまして、施設に入所して来る子どもたちには、大きな問題があったからです。その重大な問題に気づくのはずっと後のことで、初めの頃はまったく分かりませんでした。それは何かと言えば、子どもたちが抱えているのは、単に就職するための学歴や能力といった問題以前のことで、それは、いってみれば、この世界に自分が存在することの意味の喪失というものです。入所児童の家庭の背景は様々で、何かしらの子どもを自分で育てられない事情を抱えています。決して善悪で判断して、親を責めるようなことなど出来ません。しかし、子どもにとっては、やはり親から見捨てられたという思いは、程

度の差こそあれ、ぬぐい去ることは出来ないことも事実でした。職員からその事情を説明しても、なかなか腑に落ちるということは難しいことです。そこでは、子どもたちは、自分をこの世界に誕生させた親が、自分の養育を放棄したのだと受け取るわけです。すると、自分がこの世界に生まれてきたことは、間違いだったのではないかと感じるようになるのだと思います。つまり、この世界での自分の存在意義を、持てなくなってしまうということです。このことが、児童養護施設に入所して来る子どもたちが抱えている、深いところでの問題なんだと考えるようになりました。

職員は、子どもたちの満たされない愛情を埋めようと、献身的に関わり、自分が親代わりになってまでも、あなたが大切な存在なのだと伝えようとします。しかし、その様な努力には限界があり、多くの場合は、力尽きて自分の無力さを知らされることとなります。数年で辞めて行くこともしばしばです。その心に広がる大きな穴は、おそらく親以外には決して埋めることは出来ないものなのだと、思い知るようになります。そして、一度崩れてしまえば、親であっても、後からいくら関係を回復しようとしても、すでに修復は難しいということも実感しています。

このような、なぜ自分はこの世界に生まれてきたのかというような、存在することの理由を問うような問題に対して、私たち人間は、とても無力なんだと思います。どのような、偉大な人であっても、その人に自分の存在を肯定してもらったからといって、それで十分に納得できるということは難しいでしょう。私は特に児童養護施設に入所して来る子どもたちのような場合、やはり、親を超えて、人間を超えて、この世界に自分を出現させた存在というものが、どうしても必要になってくるのだと思います。たとえ、親に対してその対象を見出すことが出来ないのだとしても、親を超えて、自分がこの世界に生まれてきたのには、意味があったんだと思えることが、本当に必要なんだと考えるようになりました。それが、イエス・キリストの神だったというわけです。そして当然、児童養護施設の子どもの場合、では、なぜ、神さまがいるのであれば、私に他の人とは違う、親と一緒に暮らせないという苦しみを与えるのかという疑問は出て来ることと思います。しかし、私が経験したことから言えば、その様な問いより、自分がこの世界に存在する意味を与えてくれることの方が、上回って重要になって来ることだと思います。意味がある苦しみは耐えられても、意味がないことに対して、人間はそれをする目的を見いだせないからです。生きる理由が与えられない以上、人は本当の意味で生きることは出来ないでしょう。それだけ、意味なく世界の中で存在することは、耐えきれないことなんだと思います。たとえば、自分は親なんて信用できないし、親だなんて思っていないという子どもがいたとします。その子にとっては、神さまが自分をこの世界に誕生させてくれた本当の親なんだということが、どれほどその子に生きる意味と希望を与えてくれるかと思います。自分は、神さまの子どもなんだとうこと。このことが、自分の存在が肯定され、この世界にいてもいいんだと思える根拠を与えてくれるのだと考えるようになりました。

そしてこのことは、児童養護施設の子どもたちのような境遇の人々にとっては、特に必要とされることだと思いますが、それだけではなく、私は、結局すべての人に必要になってくるのではないかと考えています。すべての人が同じ親である神さまから出てくる子どもであり、そしてその神さまの元に帰って行く存在なのだ。このことが、どのような境遇の人にとっても、深いところから自分の存在を肯定してくれて、見えているところに左右されない大きな安心を生み出してくれるものだと思います。

私たちは皆、この世界に生きていて良いのです。他の誰かがそのことを否定してダメだと言っても、父なる神さまが「よし！」と言ってくれる限り、私たちは存在することをゆるされているのです。このことが、私はすべての人にとって必要とされる良い知らせ、福音だと信じています。